

資本論偏歴

鈴木鴻一郎著

価二二〇〇円

資本論研究の著者 生計、経済的状況
 本書は、資本論の機会に書かれたもの
 である。その研究全篇が、世に問われ
 ている。その古典として、その歴史
 史の多角的に考証する興味深い著書である

朝鮮近代史研究

姜在彦著

価三〇〇〇円

本書は資本主義列強が朝鮮に接近する前後か
 日本、植民地に転化した。その時期ま
 主要な政治的事変の歴史の性格を分析するも
 朝鮮史の正當な地位を争うとする

現代婦人問題入門

松下圭一編

価九八〇円

激変する現代社会のなかで、婦人問題は新
 な課題を背負っている。本書はその
 現代婦人問題に対する理論的解明を試みる。

樓画報永久保存版

赤瀬川原平著

アカイアカイ、アサヒアサヒ、でシャッカリス、と
 せめた。幻の名画。ここに再登場。見よ。この首の
 し桜の花びらを。見よ。この資本制の腐りゆく権威。
 打ち建てられた金メッキの金字塔を。
 ▼B5判上製箱入美麗装束・定価一五〇〇円

沈黙の弾機

上野昂志評論集

ヤクザ映画論、演歌論、マンガ論等の風俗的傾向を押し
 されることなく、ひたすら、ことば、意識、沈黙、内
 の問題へと肉迫する鋭い評論集。
 ▼四六判・定価九八〇円

爆破

野本 三吉著
 ヤマギシ会、山谷、宮古島と人間関係の原理を素直に
 著者が構想実験爆破の被害との対話を終つて新しい共同性
 男女論を展開する。

▼B6判・定価六八〇円

異端の唯物論

渡辺一衛評論集

主観主義の氾濫する今日に向けて科学的理論を建設し
 く意志を説く本書には心優しい 人間論 が眠っている。
 ▼四六判・定価九八〇円

郷愁論

竹久夢二の世界 秋山 清著

夢二のイメージを反逆的に漂泊するパノラマ論として問
 直した戦慄的でユニークな書。
 ▼A5判・一五〇〇円

東京都千代田区猿樂町一の二の三 青林堂

エメラルド色のそよ風族の話

山尾三省

一九六八年の五月、園分寺市の古い大きな
 アパートの十畳間に三〇人ばかりの異様な風
 体の若者たちが集まっていた。髪の色を長く
 のびし、ひげをぼうぼうと生やした男たち、
 ビーズ王で作った首飾りや腕輪をつけ、イン
 ディアン風の髪バンドや色とりどりの服装を
 した娘たち——現在でもそんな風体の若者が
 三〇人も集まったら少々異様な光景だろう
 が、その当時はいっそ物狂おしい有様だっ
 たのだ。

「ぼくらは宣言しよう。この国家社会とい
 う殻の内にぼくらは、いま一つの、国家とは全
 く異なる相を支えとした社会を形作りつつ

ある、と。統治する或いは統治されるいかな
 る個人も機関もない、いや、統治」という言
 葉すら何の用もなさない社会、土から生まれ
 土の上は何を建てるわけでもなくただ土と共
 に在り土に帰っていく社会、魂の呼吸そのも
 のである愛と自由と智慧による一人一人の結
 びつきが支えている社会——ぼくらは部族社
 会と呼ぶ。アメリカ、ヨーロッパ、日本、そ
 の他の国々の若い世代によって、何百万人と
 いう若い世代の参加によって静かにあくまで
 も静かにしかし確実に多くの部族社会が形作
 られつつある。都会に或いは山の中に農村に
 海辺に局に。やがて、少なくともここ数十年
 来に、全世界にわたる部族連合も結成され、

ぼくらは国家の消え去るべき宿命を見守るだ
 ろう。ぼくらは今一つの道、人類が死に至る
 べき道ではなく生き残るべき道を作りつつあ
 るのだ。
 一人一人の人間においては、彼がその肉体
 の死と共に消え去ってしまう道ではなく、永
 遠の不滅の自己にたどりつくべき道。
 ぼくらは勧告しよう。世界中のあらゆる人
 人に、部族の結成及び部族への参加を。具体
 的には、それは個人ごと家族ごとに分離して
 いる生活の営みの放棄、国家社会における家
 族及び労働、教育の場からの国家的な思惟か
 らの離脱を前提とし、またそれは、金、土
 地、家屋、作業道具、教育、医療、研究、図

費、交通機関、生産、販売、買入機構そして一切の労働と消費に対する私有の放棄を意味する。それらをほくらは全て部族にあずけよう。彼はほくらみんなのハートと智慧を溶けあわせた偉大な人格であり、と同時にほくらの仲間だ。ほくらと彼との間には「愛する者と愛される者」の関係があるのみなのだから。

ほくらがもつとつと広い視野、宇宙的なともいべき視野と自我の奥底からの智慧の輝きをもつて見るなら、全宇宙が至高の自我——神の戯れでありその場であるように、ほくらの外部への動きは一人一人の生命全体を以って遂行していくゲームであり、社会はそのための場だ。ここではほくらは遊びの内にあり、ほくらが遊びの主人なのだ。そしてほくら一人一人が、各自の内面の深みに、いかなる論理や倫理をも踏み越えてつき進んでいく所に果すべき務めがある。それは解脱、或いは自覚、或いは実現と呼ばれている。それはまたこころも告げられている。この務めは各自己の限らないほどの人間或いは他の生命への生まれ変わりによって果し終えられる。これは彼——至高の自我——神の戯れなのだ。

と。この務めを果すため敢然とたつた一人、人里離れた所に、食もいかなる肉体的安楽も断ち、ただ坐り続け内面の深みに下り続ける道もあるが、今ほくらは、生活というゲームをなしながらこの務めを果す道で、そして部族社会というこのゲームの場を選んだのだ。ただルールが、それぞれを支えている力が相違するにすぎないのなら、いざれゲームの場にすぎないのなら、何故国家社会ではなく部族社会を選ぶのか？

ほくらはあくまでも一人一人の自覚、或いは解脱、或いは実現を主におくからだ。全宇宙は神——ハリの現われ或いは戯れであり、ほくら一人一人が神——ハリだという真理の上にほくらはこのゲームを、部族社会を形作ってゆく。ここでは生活というゲームをなしに行くに一人でできりきりまいし、結局はルールによって支配され、ゲームを務めととり進め、全く真の務めを見失ってしまふ事態はほとんどあり得なくなるからだ。ここではお互いの愛と自由と智慧の内、内面における時間の流れのほとんど決定的な連続が各自の内面に保たれ、ほくらはまっしぐらに各自の内面に深くおりに行くのだ。ゲームの内にはただから

廻りしていくだけの愚かな状態は、ほくらの誰からも消え去ってしまうだろう。人類は生き残るべき道を、一人一人の自己は無限の自己への道を見出すだろう。部族社会は、まさに夜明けの太陽のごとく全地上にあまねく光を投げかける。国家社会の下に息絶え絶えに生活している他の人類に対し、いくともいってもほくらの内面の呼吸を、大地の呼吸、魂の呼吸をとり戻させるべく、「大地に帰れ！」と、「そして自らの内に大地の呼吸をとり戻せ！」と、「部族宣言」四万六七年一月）

前の年の暮れに発行した『部族』新聞から部族宣言が読みあげられ、読み終わると殆ど皆しーんとした中で一人か二人が強く手を叩いた。エメラルド色のそよ風族の始まりであった。四万六七年というのは、人類の新石器時代以来の歴史が約四万年ということで、暗に、六七年とか六八年とかいう時間がほくらにとつてはさほど重要なものではないということを示していた。

やがて食事になり、ほくらが大好きだった焼酎がまわった。湯飲み茶碗でまわし飲み

するのである。その内に何人かが酔っばらいい、酔うにつれてミカン箱のドラムが鳴り、ギターが鳴り、フリーソングと呼ばれていたその場で即興の歌がろうろうと、しかし身勝手に歌われ、踊り出し、アパートの第一夜が過ぎて行った。

ほくらは既に鹿児島県の奄美群島中にガジュマルの夢族という集まりを持ち、長野県の入笠山中にカミナリ赤鴉族という集まりを持っていた。エメラルド色のそよ風族は、だから仲間間で出来た三つ目の部族だったわけだ。海辺でもなく山の中でもなく、郊外とはいえ東京の街の中に何故そのようなものを作る必要があったのか。

エメラルドに集まった仲間間は、簡単に言って部族が好きなのか又はそれほど好きではないけれども部族から脱け出すことに踏み切れない者ばかりだった。私のように家族をかかえておいそれと村や山での原始的な放浪的な生活に出られないものもいたし、会社をやめることは出来ないけれども部族的な生活に興味を持つものもいたし、海や山の中と同様に都会でもそれ相応の人間の存在価値を感じているものもいた。

アパートは借り切ったわけではなかったが一二、三室の部室をほくらで借りることが出来、他の住人は三世帯くらいしか居なかったのでまずは自分たちの城が出来たようなものだった。ほくらに共通しているのは、この世の中のこの社会情勢、この労働組織、この価値基準等々に厭気がさした者ばかりだったことであり、もつとちがう生活、夢のような生活、ロマンチックな、爆発するような、永遠を感じるような生活をしたいと願っている者ばかりだったことである。あとは顔がちがうように具体的にそれぞれ異なった想いを秘め、異なった夢を追っていたわけである。

部屋は一応所有者が決められた。一室に二人ぐらいずつ入った。気の合った者同士とか恋人同士とか、私の場合は家族四人で二部屋の離れに住んだ。だがそれはその部屋の部屋代を責任を持って払うというほどのことで、どの部屋も出入り自由、私室という性格のものではなかった。

食事当番が決められ、一日に二人ずつ組んで朝と夜の二食の食事を作ることにした。共通の収入源があるわけではなかったため、食費は一人頭月千五百円と決められた。部屋

代が六畳一間五千円だったから二人で入れれば二千五百円で、月最低四千円〜五千円あればやってゆける見通しが立った。四、五千円といえ、月に四、五日のバイトに行けば得られるお金である。いや晴海などで沖仲仕の仕事すれば当時でもオールナイト一晩でそのくらいのお金は稼げた。

私たちにとって何よりも大切なのは、自由に使える時間だった。美術館に勤めていた一人の仲間をのぞいて、誰一人定職を持っていない者がいなかった。物質的な欲望のために労働を売ることが仲間の間ではすでに垢ずかしいことになっていった。ポケットにお金を持っていることさえ垢ずかしい雰囲気だった。当時ヨガ体操がはやっていて、頭が重い時とか体の調子が悪い時、気分がすぐれない時はよく逆立をしたが、その時ポケットから十円玉や百円玉が転げ落ちたりすると、軽蔑したような笑いで出合った。お金がないほど素晴らしいとされていた。だから美術館に勤めていた一人などはいつも皆に非難され、一日も早く退職祝いをやろうとせがまれた。しかし彼は断乎として辭めず、朝誰よりも早く起きて出かけて行った。

食堂は十貫の間で、食事はもちろん共同だった。當時外部からの訪問者があり、家出して参加してきた者があり、放浪の途中で立ち寄った者があった、多い時は四〇人、少ない時でも二〇人は下らない人間が集まって食事をした。雰囲気は雑然としていた。一人一人にとって好きな料理もあり嫌いな料理もあり、和気藹々と食べる時もあれば悪気流の流れの中で食べることもあった。朝は寝坊をして起きてこない者にはその分だけ残しておいた。夜、出かけて居ない者のためにもその分だけ残しておかれた。食事はおおむね少な気味だった。お客が多い時には、食べ終わってもはつきり空腹感が残っていた。平等に、あるものを分けて食べるという原則は執拗なほどに守られた。肉は殆ど食べられなかったが、魚は安いアラを買って来てよく食べた。二キロばかり離れた所にある青果市場の人と仲良くなって、セリが引けたあとにくず野菜をもらってくるようになった。くず野菜といっても少ししなむ程度のじゃがいもだとか熟れすぎたバナナとか、キヤベツも人蔘も玉ねぎもキュウリもナスも何でもあった。お札にぼくらは市場の掃除をした。リヤカーに

旗宣言の中にある通りである。時間が自由で、誰でも安く出来、資本は最も少なくてすむ商売——屋台をやることになった。早速リヤカーを見つけて、屋台を作り、或る日二台のラーメン屋の屋台が夜の国分寺の街に繰り出した。だが何と私たちは無知だったことだろう。屋台というものはちゃんと地巡りによって地盤が決められていて、駅前の人出の多い所などで出来るものではなかった。或る若い地巡りに張りこぼされて、ネオンも絶えた殆ど人の通らない所しか店を出すことが出来なかった。けれども私たちは、屋台の成功如何にエメラルドの運命がかかっていると感じていたから、あつちへこつちへ場所を移しては、売れる場所を探し歩いた。私たちが出したもののは鹿見島ラーメンというのには味には自信があったし、南の出身の人はその濃い味のスープを好んでくれたので、良い場所さえ見つければ商売としてやって行ける筈だった。屋台なら税金もかからない。それは気持ちの良いことだった。時には元気のいい仲間が、地巡りの届かないすきを見計らって駅前に店を出した。するとその夜は五千円近くも売れて売り切れになるのだった。

もらった野菜を山のように積んで帰ってくる、アパートでは歓声があがった。だから野菜だけはまず食べきれないほどあった。わかれだ。じゃがいもの主食はしょつ中だった。或る時はキヤベツだけしかなかった。大きな釜でキヤベツを丸ごとゆでて一人半分ずつの食事となったことがあった。

私たちは皆、権力だけは本当に嫌っていた。働かされることも同様だった。だからひとつの共同生活となっても誰かが権力的な行為に出たり、人を働かせるような行為に出たりすることをひどく嫌った。けれども共同生活の中では自然にリーダーシップというものが生まれてくるものである。リーダーシップは権力ではないが權威の始まりである。權威はやがて権力の始まりである。それは危い橋である。エメラルド色のそよ風族も、始まって一カ月もすると、その危い橋を渡り始めた。いや、そもそも始めからそれは潜在していたのである。誰も皆、独立自尊でありたかった。そうあるために集まったのだから。それに加えて絶えることなく外部から人が入ってきた。来る者はこぼまず、去るものを追わない原則の私たちに、家出人、放浪者、見

やがて『部族』新聞の二号が発行された。もう夏だった。私たちはお金はなかったが、友だちの印刷業をやっている人が、或る程度の売れ行きを見こして印刷してくれたのだった。六色刷り三〇ページという豪華な新聞だった。

私たちは富士見の赤ガラス、スワノセ島のガジュマルの夢族も含めて、直接の仲間がこれ以上増えることを望んでいるわけではなかった。むしろ責任感に乏しく、自分勝手に、忍耐力もない若者の興味本位とでもいいくなるような訪れにうんざりしていたと言った方が正確だった。私たちが望んでいたのは、新聞というようなものを出すことによって、時代の病根を背負って生きる仲間の若者たちに刺激を与えたと同時に、彼ら自身の独自の集まり、敢て部族という名はどうでもよく、独自の集まりを作りたいということがあるらいいのだ。どの道フーテンの新聞というところで、その殆どは週刊誌並みに読み棄てられるのは知れたことだが、それでも何人かの素直で鋭敏な魂を持った人には、私たちの意図が伝わってゆく筈であった。また彼らが現実に行動を起こさないとしても、私たちの

物人のお客は楽しみであると同時に頭痛の種でもあった。食い逃げ同然、世話ばかり焼かせる人もあれば、真に仲間性を教えてくれる楽しい物心両面のおみやげをもってくる人もいた。

私たちが形作りとうとしているものが、小さいけれどもやはり一つの社会であることは歴然としていた。一人一人が最高に自由であり、最も深く自分自身であり、しかも全体であるような社会が作られなければならない筈だった。

少々古いことになるが、スターリンは現実家であり、トロツキーは夢想家だった。彼くらは夢想家であるのに現実家でなければならぬ羽目に追いこまれていた。ねばることが必要だ。この谷間をゆっくり歩くより他にないと私は思っていた。

共同の収入源を持つことが必要だった。共同の収入源を持つば、それだけ私たちは強固に、つまり自由と秩序を持つことが出来るだろう。私たちは秩序を内心で望みはじめていた。いつ果てるでもないお祭り騒ぎに真の喜びがあるわけではない。共同の収入源はそもそも初めから私たちの第一目標だった。部

ような生き方が現実であり、可能であるということをメッセージするだけでも意味あることと思っていた。

新聞の販売は全く共同の仕事だった。連日主として新宿へ出かけて行き、新宿のあちこちへ散って新聞を売った。一号の時にはヒッピー新聞——という掛け声だったのが、今度にははつきりと部族新聞——の掛け声で売った。一部百円で売って、一部ごとに一五円が売った者の収入となった。新宿の空気が汚れているとか、人混みがひどすぎるとか不満がないわけではなかったが、それは楽しい仕事だった。殆ど全員が出かけて行き、声をからして売りまくった。ちょうど流行していた街頭ティーチンなるものが駅前のあちこちで人垣を作り、売っている一人一人がその輪の中心となつて、世の中の様々な荒浪、主として言葉とエゴイズムによる、不毛だけれどもたしかな荒浪に洗われた。そしてその何十万人という群衆の中から一人の仲間が現われた。いや仲間ではなく現われなければならない。一人は、お金を出すので喫茶店か何かしつかりした共同経営の店をやらうと言いだしたのだった。屋台が前に滑いたような状態であ

り、新聞売りもいつまでも続くわけではないので、それは全く荷も望んでいた仲間の到来だった。

九月にはそれまで美術館につとめていた仲間の退職祝いが出来た。彼が新しくすべて自分の手で作られたスナック喫茶「ぼら貝」のマスターになったのだった。今度は屋台とちがって後に引けない資本がかかっている。開店の夜は、エメラルドの全員が店に集まって、仲間だけで飲み食い歌い、それでも売り上げ金が二万円を越していた。不思議なことなのだ。普段は全然お金もないのに、何かととがあると、楽しいことがあると、必要になると、お金が自然に出てくるのである。そしてまたお金のない日、タバコも買えないでシケモクをあさる日が続くのだ。

エメラルドの定住者は大体二〇人前後、それも入れ替り立ち替りの定住者なのだが、その内の六人が「ぼら貝」のスタッフとなつた。少なくとも六人の共同作業の場が出来たのだった。一歩前進といふべきだろう。けれども同時に「ぼら貝」は自由時間というわけには行かなかった。二人ずつ組んで一日三交代、朝の十時から四時、四時から夜の十時、

夜の十時から夜明けの四時までと、六時間労働、それも年中無休の仕事が始まったのだ。だが少なくともこれは、使う人も使われる人もいない。仲間の店なのだ。

やがて一二月からはシルクスクリーン印刷をするインディアン・プロセスという名の仕事も始まり、こちらもやはり六人ぐらいのスタッフが当り、注文取り、原紙切り、刷りと或る程度の技術も必要だったが、手伝うぐらいなら誰でも出来た。「ぼら貝」の方は日本で最初のロック音楽の店として出発したから、それなりの魅力もあり、どうにか収入をあげることも出来たが、インディアン・プロセスの方は設備投資が不十分なので、何と云っても同業がかなりある職種なので、食べて行くのがやっとなというほどのものだったが、それにしては気づいた時、エメラルド色のその上風族の中で、相変わらずアルバイトの土方などをやっている人は定住者の中には居なくなつていったのだった。色々問題はつきないにせよ、とにかく共同作業という最初の目的は一応達成されたので、エメラルドは六九年からは新しい段階に入ったと言えらるだろう。では、私たち一人一人は、将来が保障され

ていないばかりでなく、食糧も明日の日も保障されてはいない集まりの中で、何を喜びとし何を支柱として生きていたのか。部族連合による革命などは結果としては起こるかも知れないが、最早私たちの直接的な興味をそそるような貨物ではなかった。私たちは決して社会革命家の集まりではなく、いわば自己革命家の集まりだったからである。しかも革命という言葉すら不要なほどの熱心な自己者の集まりだったのである。

一度の食事を作るわずらわしさから解放されて平日に一度食事を作ればよいとか、自由にお互いの部屋を訪問し合えるとか、夜遅くまで気ままにギターの弾けるとか、毎日のようにちがった顔ぶれで食事が出来るとか、共同作業の楽しさとか、わずかなお金で生活して行けるとかというところは、確かに喜びをつちかうものであり共同生活の利点である。私たちは思う存分と云ってよい程にその利点を味わった。同様にそれに見合う分だけの苦勞を味あつた。苦と楽、楽と苦、それは顛りになる柱ではない。それは大洋の波のように永遠に続くかと思える輪廻の流れである。それは部族であろうと一般社会であろうと大した違

いはないのである。

では私たち一人一人は何を求めて集まり続けているのか。部族とは何か。

私たちは共同体という言葉に出会う時にいつも或る戸惑いを感じた。心の内で、ぼくらはべつに共同体ではないという感じがいつもあった。共同体という言葉に伴う、共同感、ルール、共同性といったものと、私たちが部族という言葉で呼んでいるものとははっきり違ふ何かがある。私自身に関して言えば、いわゆるニューレフトと呼ばれている部分も含めて、党、或いは類似の組織といったものはっきりと嫌いである。ニューレフトなるものが現われて、実存的デモというような騒ぎが聞こえるようになった時に、ああ彼らもやつと少しはやるようになってきたなと感じたけれども、当然のことながらそれは私の意にかならぬ集団では有り得なかつた。

ここに一枚のアメリカインディアン絵がある。大きな帽子をかぶり、帽子には鳥の羽根が飾られてある。深い草むらの中に中腰に坐り、片手を口にあて、悲しげな遠い眼つきでこちらを見ている。草むらにはきのこが生え、カメレオンがひっそりとした眼つきでの

ぞいている。アゲハ蝶がとまっている。よく見ると横じまの小さな蛇がその首をじみたインディアンを見つめており、蛇の後ろにはまんなるい眼をした小動物が頭だけ出している。足元にはがま蛙が坐っている。亀がいる。花びらが落ちていく。腰のあたりにはくもが巣を張っている。そしてこのたつた一人の百姓のインディアンの頭のまわりにはまるい円光がとりまいていく。円光は白く光っている。

左の手には花びらがまるで子供がお菓子を持っていくように握られている。この絵の中に感じるもの、それは確かに部族の姿である。彼はただ一人である故に、全く自由である。少しもルールに支配されていない。共同性などかけらも見られない。しかもなお彼は完全にしぼられていく。ルールと言えは彼はルールそのものである。そして彼の背後というか心臓の中というか全身というか、そこには全アメリカインディアンの姿が刻みこまれてある。その姿の内に私は部族を感じる。

私たちがどういふわけか自然に集まってきた時、その奥には誰かにこのインディアンの姿があった。それは平和運動の平和などとは縁もゆかりもないほどに深い魂の平和、労働

者の悲惨などという見られた悲惨ではない、永遠の悲惨。悲惨の故に、平和の故に頭上に輝く円光があるのである。私たちは、皆かどうかは知らないけれども、多分みんな、このインディアンの姿が好きである。

ひとつの魂の中に全部族が含まれているような規則を越えた規則、秩序を越えた秩序、平和を越えた平和。そんなひとつづきの魂の集まりを求めて私たちは集まったと言つてよい。

もちろんこれはひとつの絵である。エメラルド色のその上風族の現実はその高貴な姿ではなかった。私たちひとりひとりにはるかに貧しく、都会の限られた空間の中で、土さえも満足に踏めず、自己自身であるより先に仲間性にとられ、或いは逆に我ままな甘えん坊になって仲間へ寄りかかり、日々の安易な祭りめいた雰囲気浸っていた。民主主義教育のおかげでつちかわれた安っぽい平等観念、決して原理にまで深められない平等の主張、また、誰よりも私自身がそうなのだが、受験競争の中で自然に身につけてしまった先走りの意識が、神聖であるべきはずのエメラルドの風を濁った陰気な集まりに変えてしま

ったこともたびたびである。

だがそれらのことは、いわば当然のことであって、それが私たちの試金・行なのだった。自己自身であるとはたやすいことではないといふことをみんながはつきりと知りはじめた。エメラルド色のそよ風族が始まって一年も経った時に、私たちは自分自身をヒッピーであると思う者はほとんどいなくなっていた。外部では相変わらず私たちをヒッピーと呼んでいたが、それに対してにやりとして笑いかえすほどのことが出来るようになっていた。それは、自己自身であるということがたやすいことではないという宿命に気づきはじめてた時とほとんど一致している。

またここに一片の詩がある。一一世紀チベットの撰者ミラレバのものである。

若い私は心みだれ
おろかな森に踏み入った
ひもじい精神
お情けの乾いた飯にかじりつき
たまには小石も喰ったさげのつもり
時には虚空自身にかみついた
またからから喉にいかれては

氷河の青に手を結び
或いは泉の香にむせた
時には友愛の流れに喉を鳴らし
ある時は天使の微笑に酔った
また魂凍る真冬
一枚の木綿の暗着
折りおりはくすぶる心に火をつけた
知識と知慧が道づれ
十もの善を行ない清め
心を正しく置きなおし
認識の根の深さを測り
自覚の底へもぐった
私はヨギ 信仰のたてがみゆさぶるライオ

氷河のてっぺんから
私は詩を述べ
——のりありますよう——

I am the Yogi
人間の王なる虎
霊のうちに輝き
豊かに知慧にほほえみ
人々の幸福に熱しながら
光明の森深くすわる
私はヨギ

人間の驚
翼をヨガの炎に張り広げ
翼をヨガ莊嚴にうち鳴らし
唯一の虚空を天がける
I the Yogi, am the holy one of men
私はミラレバ、
ふりむくことなく進むもの
私は宿なし
なにごとにも気にせず
なにごとにも見のがさぬ
私は乞食
まるはだか
無一文
生活とは関係なし
ここに住みつくいわれもない
私は心勇む
沈黙に静座に
私は惜しまない
命を
私は恐れな
死を
私は棄てる
一切を
だが君選は

ける点で、先のアメリカインディアンと
同様である。同時に、人々の幸福に熱しな
ら光明の森深くすわるミラレバの内に、恐
らくは全人類、全宇宙と呼んでよいほどの濃
度が凝縮されている。

私たちがこのような魂を部族と呼ぶ。サン
スクリット語にサンガという言葉がある。漢
訳されて僧伽となりやがて日本語の僧とな
る。サンガとは集まりという意味である。私
たちの集まりとは最も遠い始まりにおいてそ
のような性質のものだったと思う。

何のためにあるのでもない。ただあるため
に、あることの究極にあるために、その最も
深い平和、寂滅とさえ呼べる平和の響きにさ
そわれて集まってきたのが私たちである。
エメラルド色のそよ風族そのものは、去年

(七〇年)の夏に、住んでいたアパートが売ら
れてしまったのを契機に、より広い空間を求
めて解散した。解散式の夜のパーティはやは
り焼酎パーティとなり、歌と踊りとに満ちさ
れたが、その始まりのパーティとちがって、
歌は讃歌であり祈りであり、両手を合掌した
ままの姿の踊りであった。

解散したのはアパートであり、もともと、
魂が解散するはずはないのである。
気づいた時、私たちはいつのまにか十人
以上の子供にかこまれており、私の息子などは
もう小学校へ行きはじめている。私たちの魂
の旅、部族という旅はこの子供たちの教育と
いうことも含んで、ただより深い自己自身へ
と続けられて行くはずである。

この恐るべき詩を生み出した精神の内に、
私たちはまた部族の姿を見る。ここに居る魂
はヒマラヤの雪山の中でただひとり瞑想にふ

あるいは重荷を背によるめぐら

I am the Yogi

どんなことにも忠告しよう
どうぞ魂を導く保ち
正しい施しをするよう
そしてこの世では
自由で健康で幸福で
静かに養生するよう
いずれあの世で
遊のため
また生けるものすべてのため
共に力を合わせよう

月刊 伝統と現代

10月号
特集 旅

8月26日発売
定価三八〇円

古代日本の流浪民—藤原一—強いられた旅—
紀田順一郎／下降への旅(永山則夫の場合)—井
出孫六／幻覚の旅—羽永光利／吟遊詩人—岡道
男／中国大陸における旅—加藤祐三—他
対談 脱出・逃亡の旅—広末保・内村剛介
■調査される者の旅—青木保・西江雅之
■調査される者の旅—長沢隼子／松浦武四郎の旅—吉
田武三／シルクロード—久下司／四国遍路—近
藤喜博 連載 村岡空／富尾しげを

■既刊号あり
10月号 109号 8月号 87号 6月号 65号 4月号 43号 3月号 31号
10月号 109号 8月号 87号 6月号 65号 4月号 43号 3月号 31号
10月号 109号 8月号 87号 6月号 65号 4月号 43号 3月号 31号
10月号 109号 8月号 87号 6月号 65号 4月号 43号 3月号 31号

伝統と現代社

東京新宿市々谷田町2の5
電話 東京 (269) 7995